

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例) 髯《ひげ》

|：ルビの付いていない漢字とルビの付く漢字の境の記号  
(例) 五|分《ぶ》

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)  
(例) [ # 「糸+丸」、第3水準1-89-90 ]

-----  
「美しくしき多くの人の、美しくしき多くの夢を……」と髯《ひげ》ある人が二たび三たび微吟《びぎん》して、あとは思案の体《てい》である。灯《ひ》に写る床柱《とこばしら》にもたれたる直《なお》き背《せ》の、この時少しく前にかがんで、両手に抱《いだ》く膝頭《ひざがしら》に陰《けわ》しき山が出来る。佳句《かく》を得て佳句を続《つ》ぎ能《あた》わざるを恨《うら》みてか、黒くゆるやかに引ける眉《まゆ》の下より安からぬ眼の色が光る。

「描《えが》けども成らず、描けども成らず」と椽《えん》に端居《はしい》して天下晴れて胡坐《あぐら》かけるが繰り返す。兼ねて覚えたる禅語《ぜんご》にて即興なれば間に合わすつもりか。剛《こわ》き髪を五|分《ぶ》に刈りて髯|貯《たくわ》えぬ丸顔を傾けて「描けども、描けども、夢なれば、描けども、成りがたし」と高らかに誦《じゅ》し了《おわ》って、からからと笑いながら、室《へや》の中なる女を顧《かえり》みる。

竹籠《たけかご》に熱き光りを避けて、微《かす》かにともすランプを隔てて、右手に違い棚、前は緑り深き庭に向えるが女である。

「画家ならば絵にもしましょ。女ならば絹を粹《わく》に張って、縫いにとりましょ」と云いながら、白地の浴衣《ゆかた》に片足をそと崩《くず》せば、小豆皮《あずきがわ》の座布団《ざぶとん》を白き甲が滑《すべ》り落ちて、なまめかしからぬほどは艶《えん》なる居ずまいとなる。

「美しき多くの人の、美しき多くの夢を……」と膝《ひざ》抱《いだ》く男が再び吟じ出すあとにつけて「縫いにやとらん。縫いとらば誰に贈らん。贈らん誰に」と女は態《わざ》とらしからぬ様《さま》ながらちょと笑う。やがて朱塗の団扇《うちわ》の柄《え》にて、乱れかかる頬《ほお》の黒髪をうるさしとばかり払えば、柄《え》の先につけたる紫のふさが波を打って、緑り濃き香油の薫《かお》りの中に躍《おど》り入る。

「我に贈れ」と髯なき人が、すぐ言い添えてまたからからと笑う。女の頬には乳色の底から捕えがたき笑の渦《うず》が浮き上って、脛《まぶた》にはさっと薄き紅《くれない》を溶《と》く。

「縫えばどんな色で」と髯あるは真面目《まじめ》にきく。

「絹買えば白き絹、糸買えば銀の糸、金の糸、消えなんとする虹《にじ》の糸、夜と昼との界《さかい》なる夕暮の糸、恋の色、恨《うら》みの色は無論ありましょ」と女は眼をあげて床柱《とこばしら》の方を見る。愁《うれい》を溶《と》いて鍊《ね》り上げし珠《たま》の、烈《はげ》しき火には堪《た》えぬほどに涼しい。愁の色は昔《むか》しから黒である。

隣へ通う路次《ろじ》を境に植え付けたる四五本の檜《ひのき》に雲を呼んで、今やんだ五月雨《さみだれ》がまたふり出す。丸顔の人はいつか布団《ふとん》を捨てて椽《えん》より両足をぶら下げている。「あの木立《こだち》は枝を卸《おろ》した事がないと見える。梅雨《つゆ》もだいぶ続いた。よう飽きもせず降るの」と独《ひと》り言《ごと》のように言いながら、ふと思い出した体《てい》にて、吾《わ》が膝頭《ひざがしら》を丁々《ちょうちょう》と平手をたてに切って敲《たた》く。「脚気《かっけ》かな、脚気かな」

残る二人は夢の詩か、詩の夢か、ちょと解しがたき話しの緒《いとぐち》をたぐる。

「女の夢は男の夢よりも美しくかる」と男が云えば「せめて夢にでも美しくしき国へ行かねば」とこの世は汚《けが》れたり云える顔つきである。「世の中が古くなって、よごれたか」と聞けば「よごれました」と [ # 「糸+丸」、第3水準1-89-90 ] 扇《がんせん》に軽《かる》く玉肌《ぎょつき》を吹く。「古き壺《つぼ》には古き酒があるはず、味《あじわ》いたまえ」と男も鷺鳥《がちょう》の翼《はね》を畳《たた》んで紫檀《したん》の柄《え》をつけたる羽団扇《はうちわ》で膝のあたりを払う。「古き世に酔えるものなら嬉《うれ》しかる」と女はどこまでもすねた体である。

この時「脚気かな、脚気かな」としきりにわが足を玩《もてあそ》べる人、急に膝頭をうつ手を挙《あ》げて

、叱《しっ》と二人を制する。三人の声が一度に途切れる間をククーと鋭どき鳥が、檜の上枝《うわえだ》を掠《かす》めて裏の禅寺の方へ抜ける。ククー。

「あの声がほととぎすか」と羽団扇を棄《す》ててこれも椽側《えんがわ》へ這《は》い出す。見上げる軒端《のきば》を斜めに黒い雨が顔にあたる。脚気を気にする男は、指を立てて坤《ひつじさる》の方《かた》をさして「あちらだ」と云う。鉄牛寺《てつぎゅうじ》の本堂の上あたりでククー、ククー。

「一声《ひとこえ》でほととぎすだと覚《さと》る。二声で好い声だと思った」と再び床柱に倚《よ》りながら嬉しそうに云う。この髯男は杜鵑《ほととぎす》を生れて初めて聞いたと見える。「ひと目見てすぐ惚《ほ》れるのも、そんな事でしょか」と女が問をかける。別に恥《は》ずかしと云う気色《けしき》も見えぬ。五分刈《ごぶがり》は向き直って「あの声は胸がすくよだが、惚れたら胸は痞《つか》えるだろ。惚れぬ事。惚れぬ事...。どうも脚氣らしい」と拇指《おやゆび》で向脛《むこうずね》へ力穴《ちからあな》をあけて見る。「九仞《きゅうじん》の上に一簣《いっき》を加える。加えぬと足らぬ、加えると危《あや》うい。思う人には逢《あ》わぬがましだろ」と羽団扇《はうちわ》がまた動く。「しかし鉄片が磁石に逢《お》うたら?」「はじめて逢うても会釈《えしゃく》はなかる」と拇指の穴を逆《さか》に撫《な》でて澄ましている。

「見た事も聞いた事もないに、これだなと認識するのが不思議だ」と仔細《しさい》らしく髯を撚《ひね》る。「わしは歌麻呂《うたまろ》のかいた美人を認識したが、なんと画《え》を活《い》かす工夫はなかるか」とまた女の方を向く。「私《わたし》には 認識した御本人でなくては」と団扇のふさを織《ほそ》い指に巻きつける。「夢にすれば、すぐに活《い》きる」と例の髯が無造作《むぞうさ》に答える。「どうして?」「わしのはこうじゃ」と語り出そうとする時、蚊遣火《かやりび》が消えて、暗きに潜《ひそ》めるがつつと出でて頸筋《くびすじ》にあたりをちくと刺す。

「灰が湿《しめ》っているのか知らん」と女が蚊遣筒を引き寄せて蓋《ふた》をとると、赤い絹糸で括《くく》りつけた蚊遣灰が燻《いぶ》りながらふらふらと揺れる。東隣で琴《こと》と尺八を合せる音が紫陽花《あじさい》の茂みを洩《も》れて手にとるように聞え出す。すかして見ると明け放ちたる座敷の灯《ひ》さえちらちら見える。「どうかな」と一人が云うと「人並じゃ」と一人が答える。女ばかりは黙っている。

「わしのはこうじゃ」と話しがまた元へ返る。火をつけ直した蚊遣の煙が、筒に穿《うが》てる三つの穴を洩れて三つの煙となる。「今度はつきました」と女が云う。三つの煙りが蓋《ふた》の上に塊《かた》まって茶色の球《たま》が出来ると思うと、雨を帯びた風が颯《さっ》と来て吹き散らす。塊まらぬ間《うち》に吹かるときには三つの煙りが三つの輪を描《えが》いて、黒塗に蒔絵《まきえ》を散らした筒の周囲《まわり》を遶《めぐ》る。あるものは緩《ゆる》く、あるものは疾《と》く遶る。またある時は輪さえ描く隙《ひま》なきに乱れてしまう。「茶毘《だび》だ、茶毘だ」と丸顔の男は急に焼場の光景を思い出す。「蚊《か》の世界も楽じゃなかる」と女は人間を蚊に比較する。元へ戻りかけた話しも蚊遣火と共に吹き散らされてしもうた。話しかけた男は別に語りつづけようともせぬ。世の中はすべてこれだと疾《と》うから知っている。

「御夢の物語りは」とややありて女が聞く。男は傍《かたわ》らにある羊皮《ようひ》の表紙に朱で書名を入れた詩集をとりあげて膝の上に置く。読みさした所に象牙《ぞうげ》を薄く削《けず》った紙《かみ》小刀《ナイフ》が挟《はさ》んである。巻《かん》に余って長く外へ食《は》み出した所だけは細かい汗をかいている。指の尖《さき》で触《さわ》ると、ぬらりとあやしい字が出来る。「こう湿気《しけ》てはたまらん」と眉《まゆ》をひそめる。女も「じめじめする事」と片手に袂《たもと》の先を握って見て、「香《こう》でも焚《た》きましょか」と立つ。夢の話しはまた延びる。

宣徳《せんとく》の香炉《こうろ》に紫檀《したん》の蓋があって、紫檀の蓋の真中には猿を彫《きざ》んだ青玉《せいぎょく》のつまみ手がついている。女の手がこの蓋にかかったとき「あら蜘蛛《くも》が」と云うて長い袖《そで》が横に靡《なび》く、二人の男は共に床《とこ》の方を見る。香炉に隣る白磁《はくじ》の瓶《へい》には蓮《はす》の花がさしてある。昨日《きのう》の雨を蓑《みの》着て剪《き》りし人の情《なさ》けを床《とこ》に眺《なが》むる蒼《つぼみ》は一輪、巻葉は二つ。その葉を去る三寸ばかりの上に、天井から白金《しろがね》の糸を長く引いて一匹の蜘蛛《くも》が すこぶる雅《が》だ。

「蓮の葉に蜘蛛 | 下《くだ》りけり香を焚《た》く」と吟じながら女一度に数弁《すうべん》を攫《つか》んで香炉の裏《うち》になげ込む。「 [ # 「虫+(くさかんむり/囁のつくり)」、第4水準2-87-94 ] 蛸《しょう》懸《かかって》不揺《うごかず》、篆煙《てんえん》遶竹梁《ちくりょうをめぐる》」と誦《じゅ》して髯《ひげ》ある男も、見ているままで払わんともせぬ。蜘蛛も動かぬ。ただ風吹く毎に少しくゆれるのみである。

。「夢の話しを蜘蛛もききに來たのだろ」と丸い男が笑うと、「そうじゃ夢に画《え》を活《い》かす話しじゃ。ききたくば蜘蛛も聞け」と膝の上なる詩集を読む気もなしに開く。眼は文字《もじ》の上に落つれども瞳裏《とうり》に映ずるは詩の国の事か。夢の国の事か。

「百二十間の廻廊があって、百二十個の灯籠《とうろう》をつける。百二十間の廻廊に春の潮《うしお》が寄せて、百二十個の灯籠が春風《しゅんぷう》にまたたく、臍《おぼろ》の中、海の中には大きな華表《とりい》が浮かばれぬ巨人の化物《ばけもの》のごとくに立つ。.....」

折から烈《はげ》しき戸鈴《ベル》の響がして何者が門口《かどぐち》をあける。話し手ははたと話をやめる

。残るはちょっと居ずまいを直す。誰も這入《はい》って来た気色《けしき》はない。「隣だ」と髯《ひげ》なしが云う。やがて渋蛇《しぶじゃ》の目を開く音がして「また明晩」と若い女の声がする。「必ず」と答えたのは男らしい。三人は無言のまま顔を見合せて微《かす》かに笑う。「あれは画じゃない、活きている」「あれを平面につづめればやはり画だ」「しかしあの声は？」「女は藤紫」「男は？」「そうさ」と判じかねて髯が女の方を向く。女は「緋《ひ》」と賤《いや》しむごとく答える。

「百二十間の廻廊に二百三十五枚の額が懸《かか》って、その二百三十二枚目の額に画《か》いてある美人の…

…」

「声は黄色ですか茶色ですか」と女がきく。

「そんな単調な声じゃない。色には直《なお》せぬ声じゃ。強《し》いて云えば、ま、あなたのような声かな」

「ありがとう」と云う女の眼の中《うち》には憂をこめて笑の光が漲《みな》ぎる。

この時いづくよりか二|疋《ひき》の蟻《あり》が這《は》い出して一疋は女の膝《ひざ》の上に攀《よ》じ上《のぼ》る。おそらくは戸迷《とまど》いをしたものであろう。上がり詰めた上には獲物《えもの》もなく下《くだ》り路《みち》をすら失うた。女は驚ろいた様《さま》もなく、うろろろする黒きものを、そと白き指で軽く払い落す。落されたる拍子《ひょうし》に、はたと他の一疋と高麗縁《こうらいべり》の上で出逢《であ》う。しばらくは首と首を合せて何かささやき合えるようであったが、このたびは女の方へは向わず、古伊万里《こいまり》の菓子皿を端《はじ》まで同行して、ここで右と左へ分れる。三人の眼は期せずして二疋の蟻の上に落つる。髯なき男がやがて云う。

「八畳の座敷があって、三人の客が坐わる。一人の女の膝へ一疋の蟻が上る。一疋の蟻が上った美人の手は……」

「白い、蟻は黒い」と髯がつける。三人が斉《ひと》しく笑う。一疋の蟻は灰吹《はいふき》を上りつめて絶頂で何か思案している。残るは運よく菓子器の中で葛餅《くずもち》に邂逅《かいこう》して嬉しさの余りか、まごまごしている気合《けわい》だ。

「その画《え》にかいた美人が？」と女がまた話を戻す。

「波さえ音もなき朧月夜《おぼろづきよ》に、ふと影がさしたと思えばいつの間《ま》にか動き出す。長く連《つら》なる廻廊を飛ぶにもあらず、踏むにもあらず、ただ影のままにて動く」

「顔は」と髯なしが尋ねる時、再び東隣りの合奏が聞え出す。一曲は疾《と》くにやんで新たな一曲を始めたと見える。あまり旨《うま》くはない。

「蜜を含んで針を吹く」と一人が評すると

「ビステキの化石を食わせるぞ」と一人が云う。

「造り花なら蘭麝《らんじゃ》でも焚《た》き込めばなるまい」これは女の申し分だ。三人が三様《さんよう》の解釈をしたが、三様共すこぶる解しにくい。

「珊瑚《さんご》の枝は海の底、薬を飲んで毒を吐く軽薄の児《じ》」と言いかけて吾に帰りたる髯が「それぞれ。合奏より夢の続きが肝心《かんじん》じゃ。画から抜けだした女の顔は……」とばかりで口ごもる。

「描《えが》けども成らず、描けども成らず」と丸き男は調子をとって軽く銀椀《ぎんわん》を叩《たた》く。葛餅を獲《え》たる蟻はこの響きに度を失して菓子椀の中を右左《みぎひだ》りへ馳《か》け廻る。

「蟻の夢が醒《さ》めました」と女は夢を語る人に向って云う。

「蟻の夢は葛餅か」と相手は高からぬほどに笑う。

「抜け出ぬか、抜け出ぬか」としきりに菓子器を叩くは丸い男である。

「画から女が抜け出るより、あなたが画になる方が、やさしゅう御座んしょ」と女はまた髯にきく。

「それは気がつかなんだ、今度からは、こちが画になりましょ」と男は平気で答える。

「蟻も葛餅にさえなれば、こんなに狼狽《うろた》えんでも済む事を」と丸い男は椀をうつ事をやめて、いつの間にやら葉巻を鷹揚《おうよう》にふかしている。

五月雨《さみだれ》に四尺伸びたる女竹《めだけ》の、手水鉢《ちょうずばち》の上に蔽《おお》い重なりて、余れる一二本は高く軒に逼《せま》れば、風誘うたびに戸袋をすって椽《えん》の上にもはらはらと所|摺《えら》ばず緑りを滴《したた》らす。「あすこに画がある」と葉巻の煙をぷっとそなたへ吹きやる。

床柱《とこばしら》に懸《か》けたる払子《ほっす》の先には焚《た》き残る香《こう》の煙りが染《し》み込んで、軸は若冲《じゃくちゅう》の蘆雁《ろがん》と見える。雁《かり》の数は七十三羽、蘆《あし》は固《もと》より数えがたい。籠《かご》ランプの灯《ひ》を浅く受けて、深さ三尺の床《とこ》なれば、古き画のそれと見分けのつかぬところに、あからさまならぬ趣《おもむき》がある。「ここにも画が出来る」と柱に靠《よ》れる人が振り向きながら眺《なが》める。

女は洗えるままの黒髪を肩に流して、丸張りの絹団扇《きぬうちわ》を軽《かる》く揺《ゆる》がせば、折々は髯《びん》のあたりに、そよと乱る雲の影、収まれば淡き眉《まゆ》の常よりもなお晴れやかに見える。桜の花を砕いて織り込める頬の色に、春の夜の星を宿せる眼を涼しく見張りて「私《わたし》も画《え》になりましょか」と云う。はきと分らねど白地に葛《くず》の葉を一面に崩して染め抜きたる浴衣《ゆかた》の襟《えり》をここぞと正せば、暖かき大理石にて刻《きざ》めるとき頸筋《くびすじ》が際立《きわだ》ちて男の心を

惹《ひ》く。

「そのまま、そのまま、そのままだが名画じゃ」と一人が云うと

「動くと言が崩れます」と一人が注意する。

「画になるのもやはり骨が折れます」と女は二人の眼を嬉しがらしようともせず、膝に乗せた右手をいきなり後《うし》ろへ廻《ま》わして体をどうと斜めに反《そ》らす。丈《たけ》長き黒髪がきらりと灯《ひ》を受けて、さらさらと青畳に障《さわ》る音さえ聞える。

「南無三、好事《こうず》魔多し」と髭ある人が軽《かる》く膝頭を打つ。「刹那《せつな》に千金を惜しまず」と髭なき人が葉巻の飲《の》み殻《がら》を庭先へ抛《た》たきつける。隣りの合奏はいつしかやんで、樋《ひ》を伝う雨点《うてん》の音のみが高く響く。蚊遣火《かやりび》はいつの間《ま》にやら消えた。

「夜もだいぶ更《ふ》けた」

「ほととぎすも鳴かぬ」

「寝ましょか」

夢の話はつい途中で流れた。三人は思い思いに臥床《ふしど》に入る。

三十分の後《のち》彼らは美しくしき多くの人の……と云う句も忘れた。ククーと云う声も忘れた。蜜を含んで針を吹く隣りの合奏も忘れた、蟻の灰吹《はいふき》を攀《よ》じ上《のぼ》った事も、蓮《はす》の葉に下りた蜘蛛《くも》の事も忘れた。彼らはようやく太平に入る。

すべてを忘れ尽したる後女はわがうつくしき眼と、うつくしき髪の主《ぬし》である事を忘れた。一人の男は髭のある事を忘れた。他の一人は髭のない事を忘れた。彼らはますます太平である。

昔《むか》し阿修羅《あしゅら》が帝釈天《たいしゃくてん》と戦って敗れたときは、八万四千の眷属《けんぞく》を領して藕糸孔中《ぐうしこうちゅう》に入《い》って蔵《かく》れたとある。維摩《ゆいま》が方丈の室に法を聴ける大衆は千か万かその数を忘れた。胡桃《くるみ》の裏《うち》に潜《ひそ》んで、われを尽大千世界《じんだいせんせかい》の王とも思わんとはハムレットの述懐と記憶する。粟粒芥顆《ぞくりゅうかい》のうちに蒼天《そうてん》もある、大地もある。一世《いっせい》師に問うて云う、分子《ぶんし》は箸《はし》でつまめるものですかと。分子はしばらく措《お》く。天下は箸の端《さき》にかかるのみならず、一たび掛け得れば、いつでも胃の中に収まるべきものである。

また思う百年は一年のごとく、一年は一刻のごとし。一刻を知ればまさに人生を知る。日は東より出でて必ず西に入る。月は盈《み》つればかくる。いたずらに指を屈して白頭に到《いた》るものは、いたずらに茫々《ぼうぼう》たる時に身神を限らるるを恨《うら》むに過ぎぬ。日月は欺《あざむ》くとも己れを欺くは智者とは云われまい。一刻に一刻を加うれば二刻と殖《ふ》えるのみじゃ。蜀川《しょくせん》十様の錦、花を添えて、いくばくの色をか変ぜん。

八畳の座敷に髭のある人と、髭のない人と、涼しき眼の女が会して、かくのごとく一夜《いちや》を過した。彼らの一夜を描《えが》いたのは彼らの生涯《しょうがい》を描いたのである。

なぜ三人が落ち合った？ それは知らぬ。三人はいかなる身分と素性《すじょう》と性格を有する？ それも分らぬ。三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？ 人生を書いたので小説をかいたのではないから仕方がない。なぜ三人とも一時に寝た？ 三人とも一時に眠くなったからである。

[ # 地から1字上げ ] (三十八年七月二十六日)

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987 (昭和62) 年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年4月～1972 (昭和47) 年1月

底本文では、「 [ # 「虫+ (くさかんむりノ嘯のつくり) 」、第4水準2-87-94 ] 蛸《しょうしょう》」は「虫+嘯のつくり」とつくってある。しかし、底本の注記では、つくりにくさかんむりのある「 [ # 「虫+ (くさかんむりノ嘯のつくり) 」、第4水準2-87-94 ] 」が用いられている。下記の異本とも照合の上、当該の箇所は「 [ # 「虫+ (くさかんむりノ嘯のつくり) 」で入力した。

「倫敦塔・幻影の盾」岩波文庫、岩波書店

1930 (昭和5) 年12月20日第1刷発行

1990 (平成2) 年4月16日第23刷改版発行

1997 (平成9) 年9月5日第30刷発行

「倫敦塔・幻影の盾」新潮文庫、新潮社

1952 (昭和27) 年7月10日初版発行

1968 (昭和43) 年9月15日20刷改版発行

1997 (平成9) 年4月25日69刷発行

入力：柴田卓治

校正：LUNA CAT

2000年9月11日公開

2004年2月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。